



発行日 = 2008年2月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・小川 祐樹・矢野 大輔
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org http://www.shomei-tanteidan.org

照明探偵団通信

vol.30 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート 1

フィリピン調査
亜細亜 × 西欧
(11/18-22)

海外調査レポート 2

オランダ調査
豊かな水が作り上げた街
(12/6-9)

国内調査レポート

東京調査
ごちゃまぜシティ!? 渋谷
(11/29)

照明探偵団倶楽部活動 1

第 34 回街歩き
- A Roppongi Christmas -
(12/10)

照明探偵団倶楽部活動 2

Transnational Tanteidan Forum 2007
in Copenhagen
(12/4)

PLDC 2007 - London

(10/25-27)



オランダ・アムステルダム

フィリピン調査 亜細亜×西欧

2007.11.18-22

菅又 健雄 + 服部 祐介

■アジア隋一のキリスト教国・フィリピン

実はフィリピンの街には教会が点在し、そこは人々の生活の拠点となっている。日曜ともなれば、神に祈る信仰心の厚い人々であふれている。私たちが知る教会建築というのは西欧のものが大半で、ロマネスクにしろ、ゴシックにしろ、自然光は常にその空間の主役であり、大きく高い開口部を設けるために様々な技術が集約されている。

南国フィリピンの教会を見ると、西欧の教会ほど大きく開口部がとられていないようだった。フィリピンが地震大国で西欧よりも安定した構造が求められたことや、強烈に差し込む日射への対応などが推測され、教会建築が南国風に改良されていったのだと考えられる。薄暗い教会の中、求心性を持って空間を支配するのは間接照明で厳かに照らされたキリスト像で、ドームの間接照明、シャンデリア、ブラケット、蝋燭など多彩な光の組み合わせで神聖な空間が演出されていた。機能的に取り付けられた白色蛍光灯や扇風機によって、アジアらしい生活感を醸し出している教会が多く見られたのも興味深い。また、ファサードがライトアップされている教会が多く、概ねメタルハライドランプ、もしくはナトリウムランプのフラッドライトの、のっぺりとした光によって教会の正面が均一に照らされており、中には重厚な要塞のように見える教会もあった。

11月のマニラでは、既にいたるところでクリスマスイルミネーションが見られ、マーケットでもイルミネーション用の光粒が溢れかえって並んでいた。ハロウィーンが終わって11月には入るやいなや、街はキリストの誕生を祝う準備に取り掛かるようだ。日本のように、突発的に商業的なイルミネーションとは異なり、ふと気づくと常に樹木が光のオブジェをまとっている風景に、人々の生活にキリスト教が溶け込んでいる様子がうかがえた。



ネオン十字架 (St. Paul Metropolitan Cathedral @ VIGAN)

■スペイン、日本を経て

そもそもフィリピンにおけるキリスト教は、今からさかのぼること300年以上前のスペインによる統治時代の影響だ。第二次世界大戦時に日本が占領するまでは、マニラにはスペインの街並みが残っていたのだそう。現在でもイントラムロスと呼ばれるエリアは、修復保存や復刻が行なわれ、少ないながらもスペイン情緒を残す街並みがある。夜になると、ナトリウムランプで統一された洋風の街路灯がノスタルジックだった。戦禍を逃れ、300年前の街並みが保存されているというVIGAN (ビガン) という街でも、日が暮れると洋風の街路灯が、反射率の高い路面や壁を濃いオレンジ色へと均一に染め上げていた。屋間には街並みの良いアクセントになっていた植栽の濃緑が、夜の闇に沈んでしまうのは残念に感じたが、ブルーモーメントの空と褐色に染められた街のコントラストは、まるで映画のワンカットのようだった。



300年前のスペイン風住宅 - 昼と夜 -

フィリピンと聞いて想像できるのは、バナナ、パプ、ルビー・モレノ…。一体どのような国で、どのような光があるのだろうか。探偵団としてこれは一度調査しなければ、と評判の悪い治安とリゾート・ナイトライフの情報だけを頼りに、カメラと照度計と少しの不安を持って、我々はフィリピンに乗り込んだ。



フラッドライトで壁面を均一にライトアップ (Manila Cathedral)



フィリピン最古の教会の内部は蛍光灯で暗さをしのぐ (San Agustin Church)



11月になると街のいたるところでクリスマス



スペイン情緒のノスタルジックな風景

■南国オフィス街の夜景

高いところから夜景を見て、その都市の光のコンテクストを読み取るというのは、もはや照明探偵団の定石。我々は、マニラでも例外なく高所撮影を敢行すべく、フィリピン経済の中心地マカティ市にやってきた。高層ビルが林立している風景は、どこの国でも見られる大都市のそれと大きく変わらない。マニラとしては、逆に個性的な風景なのかもしれない。夜景を観察していると、ビルの窓ガラスには透明ガラスではなく熱線吸収ガラスが使われているので、煌々と漏れているはずの蛍光灯の輝きが緩和されていることに気が付いた。これは熱帯に特有の夜景なのかもしれない。夜7時の時点で、オフィスはすでに閉まっているところが多く、窓からの光はさらに寂しかった。同時刻の東京ではやはり考えられない夜景だ。このエリアではこれから完成するコンドミニアムも多いようで、この夜景の光はこれから徐々に密度を増して行くのだろう。



富裕と貧困の陰影 (PB Com/Sony Life Insurance より撮影)



街路灯の色温度がバラバラ

■街の光は誰のもの？

ロハス大通りはマニラを南北に縦断している、生活の主軸。マニラ湾に面してヤシの木の植栽帯と幅員の大きな歩道が併設されていて、夕暮れ時になると地平線に沈む太陽に導かれるように人が集まる憩いの場になっている。日が落ちて、そこにいるカップル、家族、屋台のおじさんなど全ての人を照らすのは、リフレクター型の歩道灯だった。反射板はナトリウムランプの光を受けて、100lxの光を路面に叩き落していた。ポールの側面は、無数の穴が白色蛍光灯の光を通して発光していて、緩やかな曲線を描く湾岸の景観を分かりやすくナビゲートしていた。特筆すべきは、車道側のデコラティブなポール灯。点灯すると、ナトリウムランプで発光する大玉を、それぞれ赤、緑、青、白色に光る小球が分子構造のように包んでいて、それが1km連続する。ポールの側面は、歩道灯と同じ原理で各色に発光していた。この色使いと、シルエットになって浮かぶヤシの木はまさにアジアの南国だ。この大通りには、同じようなデコラティブなポール灯が計3種類あり、特別な通りにしようとする行政の意図がうかがえる。

多くの通りでは、街路灯の不点灯を相次いで発見した。街路灯のランプの色がばらばらであったり、そもそも器具が壊れていたり、無くなっているところも見られた。このようなメンテナンスの悪さは、マカティなどの一部の新興富裕層が生活する街ではなく、パサイ、エルミタ、キアポなど多くの低所得者層が生活する街で見られ、行政対応の格差を残酷なまでに肌で感じた。生活難と暗い街路が、夜間の犯罪を促すという悪循環の図式は、マニラでも例外なく当てはまり、やはり犯罪の温床となっているようだった。ブルジョアから浮浪者まで分け隔てなく照らすのは自然光だけでよいのだろうか。そんな疑問を胸に抱かざるを得ない光景だった。

(服部祐介)



シンボリックな街路灯が1km続く (Boulevard Mansion より撮影)



マニラの夕景と色とりどりのポール灯

オランダ調査 豊かな水が作り上げた街

2007.12.6-9

板倉 厚+窪田 照彦

■アムステルダムと運河

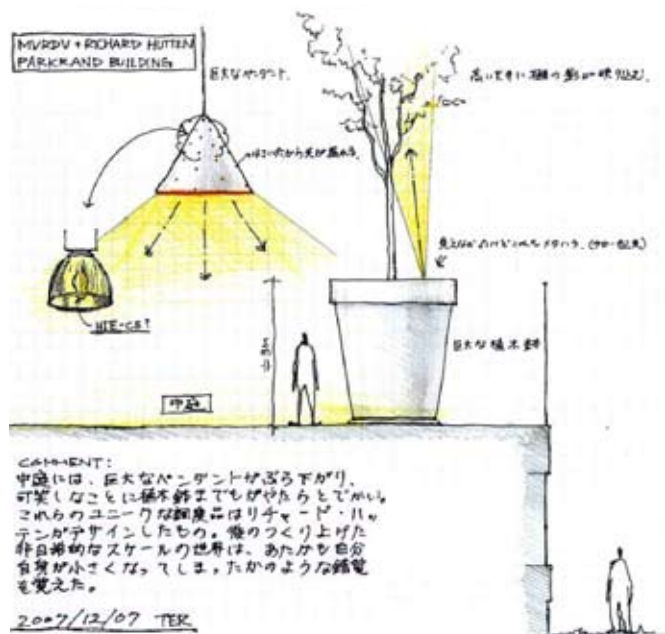
アムステルダムの街は、5つの運河が中央駅を扇状に取り囲むように構成されている。ゆったりと弓形に続く流れに橋が架かり、かもめや水鳥、小型船、そして、ノスタルジックなレンガ造りの建物が、美しい景色をつくり出していた。

一方で、近郊の再開発地区には斬新なアイデアでパワー溢れる現代オランダ建築が数多く出現している。中でもMVRDV設計の集合住宅『Parkrand Building』には目を見張るものがあった。ランドマークとして存在感のある建築の中庭には、巨大なランプシェードとシャンデリアがぶら下がっていて、巨大な植木鉢も置かれている。これらのユニークな調度品はリチャード・ハッテンがデザインしたもので、彼のつくり上げた非日常的なスケールの世界は、シュールでありながら、建築に人間的な温もりを与えているように感じた。



巨大なシェードとプランター

巨大なランプシェードとシャンデリアが気になった我々は、日没の訪れを待った。住民が帰宅し始め、日が暮れ始めた午後4時頃、徐々に各住居に窓明かりが灯る。諦めかけた頃、ついに巨大なランプシェードが点灯した。じわじわと明るくなるのはメタルハライドランプを使っているからだ。ランプが安定した頃には広い中庭を照らして、シェードの内側に塗装されたオレンジ色が暖かく印象的だった。また、植木鉢にはアップライトが仕込んであり、小枝の影が高い天井に投げかけられていた。



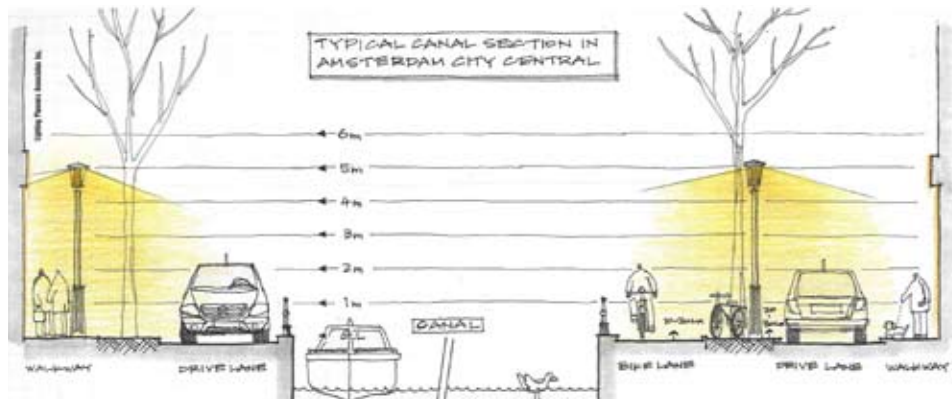
パークランドビルディング



スポンブルグ集合住宅



花屋の店先



アムステルダム市内 運河



水辺にこぼれる家からの光

■ 東部湾岸地区再開発

アムステルダム中央駅から東へ3キロ程の距離に位置する東部湾岸再開発地区。近年この地区一体は、アムステルダムっ子の憧れの的になっており、お洒落で斬新なデザインの集合住宅が次々と出現している。

住宅から水面が目と鼻の先に広がる、水の都市ならではの建築デザインが多く見られた。また、The Whaleと呼ばれる鯨の尻尾に似たユーモア溢れる集合住宅や、埠頭を跨ぐように架けられた、パイソンという蛇のように曲がりくねった橋など、建築から橋まで現代オランダ建築のパワーを間近に感じることができる。中でも照明デザイン的に目を引いたのは、The Whaleだ。その夜の姿は、屋間には想像もつかないようなユニークな照明デザインが施されている。ピロティーには青色の蛍光灯が灯り、中庭に面した外廊下は補色のオレンジ色の光で染められていた。住宅照明でこんな大胆不敵なデザインが許容される、オランダデザインの懐の深さを見た思いがした。

パイソン・ブリッジのトンがり帽子のような突起物も実は照明器具で、夜になると内部に仕込まれたコンパクト蛍光灯でデッキと橋全体を浮かび上がらせていた。

これだけバラエティーに富んだ照明デザインを見ていたので、さぞかし道路や歩道照明も面白いのではと期待したが、普通のポール灯が点灯しているだけで少しがっかりした。どこでも民間と行政の間には温度差があるものだと感じた。



Whale! ピロティー



うねった形が印象的なパイソン・ブリッジ

■ レベルの高い照明計画

この国の照明デザインのおすごさは集合住宅に限らない。オフィスビルや駅舎にも逸品があるのだ。大抵のオフィスビルは、ワークゾーンが電球色の暖かい光で統一され、光源が見えてしまう場合でもルーバーで覆っている。そのため、外部から蛍光管が直接ギラギラと見えてしまうようなことはない。機能照明と同時に、アンビエント照明がきちんと計画してあるので、天井や壁面の鉛直面が美しく均一に照らされ、窓から漏れる光の景色が縁取られた絵画のように見える。

駅舎の場合も、照明の機能とデザインがうまく融合しているものが多く見られた。空間を見せるアンビエント照明と明るさ確保のための機能照明のバランスが良い。

アムステルダムは東京や、他のアジアの都市のように、ファサードを過度に照らすことや、流行のLEDを用いて無秩序にカラーライティングしているようなことはなかった。しかし、明確に意図を持ってデザインされた光は、アートのようで見ていて心地良いものだった。

我々は悪い癖で、建築の外観照明を考える際に、どのように外観を美しく浮かびあがらせるかに傾倒しがちだが、窓から漏れる光を上手に計画するだけでも十分に美しい外観ができることを再認識した。



スキポール空港

■ Space Station?

オランダといえば？ 風車、チューリップ、チーズ、ミッフィーなどを想像するかもしれない。しかし、空の玄関口、スキポール空港の存在を忘れてはいけない。ヒーローアニメやスターウォーズを見て育った世代にとって、この空港はまさに、“巨大な宇宙基地” のようで、ワクワクとした気持ちにさせられた。連続したむき出しの構造体や、照明デザインがその雰囲気を出している。世界のベストエアポートにも選ばれたこともあり、見た目のデザインだけではなく、快適で利用しやすい空港だと感じた。

また、サイン計画が実に明快でわかりやすいため、利用者が空港内で迷うような不安も少ない。機能照明に関して言えば、日本の空港のように明るいとは言えないが、空間を見せるように施された照明は、快適で陰気に感じることはない。

空港を訪れる人や利用する人々を楽しませる、様々なアートワークやデザイン的な仕掛け。そんな遊び心いっぱいのスキポール空港に好感を抱いた。

(板倉厚・窪田照彦)



明確なサイン計画



空港内のアートワーク

東京調査 ごちゃませシティ!? 渋谷

2007.11.29

上田 夏子+永津 努+藤井 茂紀

我が照明探偵団事務所から目と鼻の先にある渋谷。
今回私たちは敢えてこの身近な土地に眼を向け、時代と共に変化をしつづける街・渋谷の今を光の観点から捉えようと試みました。渋谷の街が発展の歴史の中で生み出してきた光、そしてそれらの光がいかにこの街の夜を特徴づけているのかを探ります。



スクランブル交差点から109方面を望む

1 渋谷を構成する個性豊かなエリア

渋谷には飲み屋や各種ショップに始まり、流行りのインターネットカフェからはては風俗・ラブホテルまでと現代の若者達を魅き付ける要素がギュッと凝縮している。それもただごちゃませに凝縮しているのではなく、それぞれの要素が群れを成すことで各エリアごとの個性を生み出している。その中で今回私たちが目をつけたのは、渋谷の街を代表する個性豊かな4つの表通り(道玄坂通り、文化村通り、センター街、公園

通り)とそれに挟まれる裏通り(円山町)だ。異なる個性や役割を持つ街角にはそれを反映した光環境が形成されるもので、日没後に現れる各所の光景はその通りやエリアの個性をより明確に映し出す。調査を決定したのは2007年のクリスマスシーズンが幕を開けた11月末、街にはクリスマスイルミネーションが施され、私たちが調査を行った大通りでは交差点などを除くほとんどの範囲

でポール灯が消灯されている状態だった。それでもポール灯が消灯されていることに気づかないほど看板光や店舗光が街を照らしていて、改めてこの街には光が溢れているということを確認した。これらの光からエリアごとの個性を読み取り、光の個性と街の個性との関係性を探っていくことが今回の調査の課題となった。

(藤井茂紀)



丸見えの光源

2. 対極の通り

～センター街、公園通り～

センター街は一言で言うと陰のない、光のみがせめぎ合う通りだ。高校生を中心とした若者が集まり、流行語、最新アイテムなどブームの発信源となっている。狭い道に無数の店がお客をつかもうと煌々と光を放し、袖看板(突き出し看板)が顔を並べる。一見無秩序に見えるが、面白いことに道の真ん中を歩いていると看板同士が重なりあって見えなくなることはなく、全体としては上手く構成されている。

公園通りはセンター街と比較してやや年齢層が高い(20代ぐらい)通りだ。マルイシティの角を曲がるとゆるやかなのぼり坂になり、視線を上げると目の前にPARCOが見えてくる。袖看板もセンター街に比べると少なく、陰が多い。私はセンター街と比べるとこちらの方が通りとしては好きだ。調査日はちょうどクリスマスシーズンと重なったため、街はイルミネーションで華やかに飾られていた。意外だったのは、点灯している街路灯が交差点や駐車場入り口、バス停留所ぐらいで、その他はほとんど点灯していなかったことだ。木の枝ぶりは表参道の櫻ほど立派では無いが、余計な光が少なくイルミネーションが映えていた。

渋谷を調査して見えてきたのは、色温度・照度、店のグレード、年齢層に関係性があるということだった。安く買物が出来る店が立ち並ぶエリアには、色温度、照度が高い光環境が多く、あまりお金を持っていなさそうな若い世代が多いようだった。色温度を高くすると身体活動が活発になり、客の回転が速くなるという説もあるが、それも関係しているだろうか。

もしセンター街を色温度が低く、光と陰のバランスの良い光環境に変えたら、高校生など若い世代が集まるエリアであり続けるのかどうか、試してみたいものだ。

(永津努)



溢れんばかりの光に誘われるセンター街入り口



多いときには一回の信号で3000人が通行するスクランブル交差点

3. 渋谷のおモテとウラ

～109を分岐点とする道玄坂通りと文化村通り、裏側の円山町について～
 渋谷駅前のスクランブル交差点をいくつもの巨大スクリーンが囲む様子は、情報発信基地・渋谷の最大の特徴ではないかと思う。道玄坂通り・文化村通りは、これまでほとんど歩いたことが無かったが、今回特徴的な渋谷の姿を発見することができず、残念な思いをした。道玄坂通り・文化村通りでは共通して、ありふれた居酒屋やショップの看板照明がまず目に入った。看板以外のファサードへの光はほとんど無く、街が沈んだ印象だ。予想より人を刺激するような光の動きも少なく、道玄坂通りのゲームセンターやパチンコに特徴のない光がある程度だった。

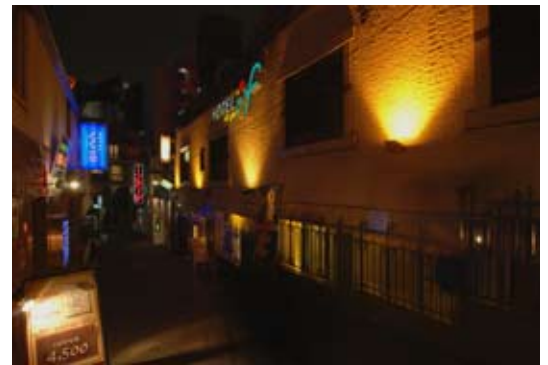
ポール灯は、それぞれの通りによって多種多様にデザインされていて面白い。ポール灯が看板やサインとなったり、イルミネーションの電源を備えていたり、スピーカーから音を出したり…といった機能を持ち、デザインは異なるけれど、渋谷らしい共通点が見られた。

裏側の円山町には、表通りとは異なる独特な雰囲気がある。ラブホテルの密集した街という特徴だけではなく、照明探偵の観点からその原因を分析した。

表通りと異なる点は、道幅が狭いにも関わらずポール灯の位置が高く、演色性が悪く、水平面照度が20lxと他の通りに比べて低いが、ファサードのライトアップが積極的になされているため、鉛直面の輝度が高いことだ。これはいろいろな事情のキャップを明るく照らし出さず、さらに女性の顔を直接光で照らさず美人にみせる配慮だろうか・・・。

また赤・青・緑などのカラーライティングが多い。こうした光は、普段街中では下品に感じることもあるが、街全体としてカラーが多く使われているのは、かえって個性として面白く感じた。渋谷のおモテは“動きがあってインタラクティブ”、ウラは“カラフルに美しく”という印象だ。これからも、どこにもない渋谷の光の個性が無くならないで欲しい。

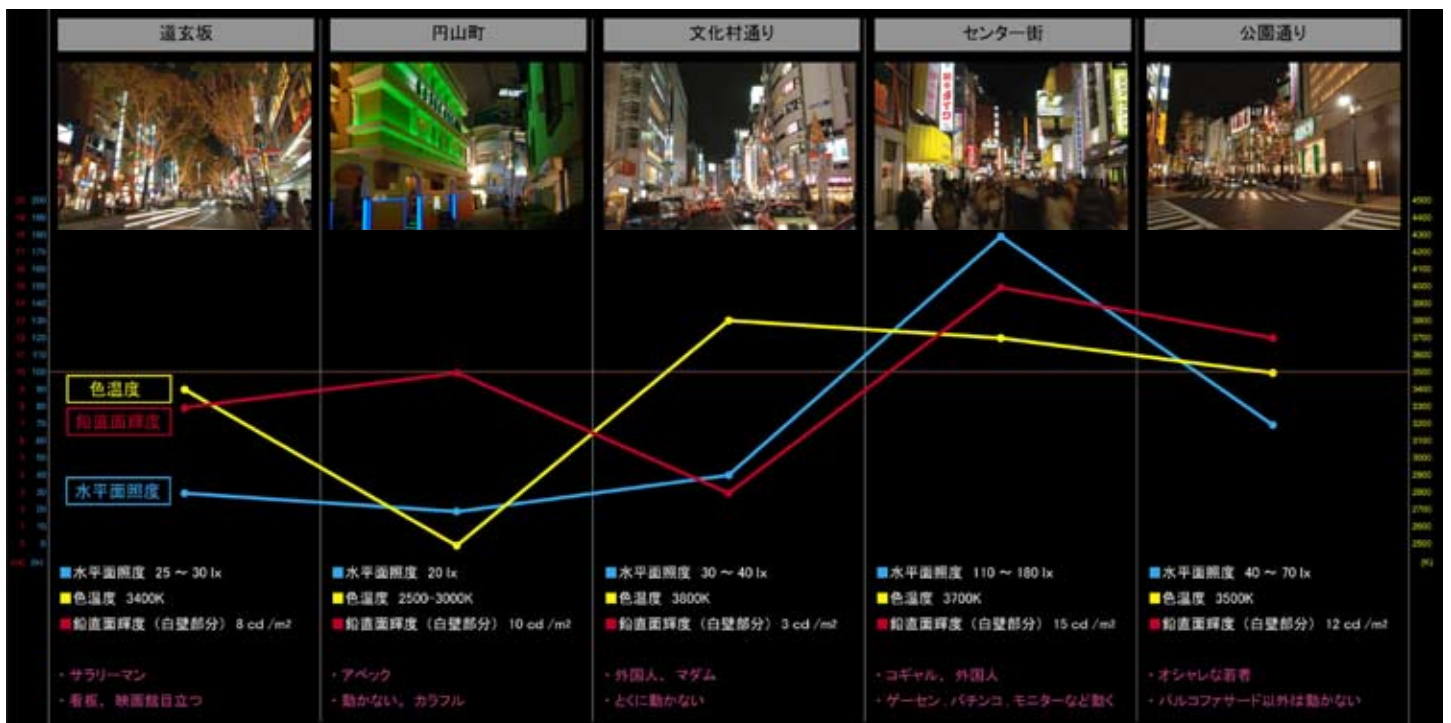
(上田夏子)



円山町では路面は暗いが壁面には光がある



色とりどりのファサードライティング



各エリアのデータ比較